

世界遺産論

第12講 海外の世界文化遺産 (近代国家の成立と世界の近代化)

瀬戸 敦子(岐阜女子大学)

第12講 海外の文化遺産

(近代国家の成立と世界の近代化)

【目 的】

- テキスト第7章より「自由の女神像」、「ウィーンの歴史地区」のOUVについて理解する。
- 危機遺産「ウィーンの歴史地区」における都市開発と保護・保全の考えについて理解する。

【学修到達目標】

- 「自由の女神像」の概要と登録内容について説明できる
- 「ウィーンの歴史地区」の概要と登録内容について説明できる
- 「ウィーンの歴史地区」が危機遺産に登録された理由を説明できる

第12講 海外の文化遺産（近代国家の成立と世界の近代化）

テキスト 第7章（p.135～146）

- 7-1 絶対王政
 - ヴェルサイユ宮殿と庭園
 - マドリードのエル・エスコリアル修道院と王立施設
- 7-2 啓蒙専制君主
 - シェーンブルン宮殿と庭園
 - ポツダムとベルリンの宮殿と庭園
- 7-3 周辺主権国家
 - ウェストミンスター宮殿、ウェストミンスター・アビーとセント・マーガレット教会
 - サンクト・ペテルブルクの歴史地区と関連建造物群
- 7-4 ウィーン体制
 - ウィーンの歴史地区**
- 7-5 産業革命 ニュー・ラナーク
- 7-6 南北アメリカの独立 **自由の女神像** ブラジリア

第12講 海外の文化遺産（近代国家の成立と世界の近代化）

ウィーンの歴史地区（オーストリア・2001年登録）

登録基準 (2) (4) (6)

危機遺産 2017年

多彩な建築様式と音楽の都として繁栄した古都ウィーンは歴史地区全体が世界遺産に登録された。現在残る**歴史地区はおよそ260年前の景観と変わらない**。（17世紀の街並み）

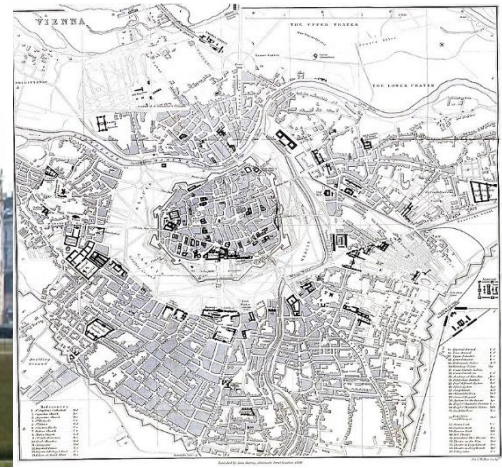


聖シュテファン大聖堂



ベルヴェデーレ宮殿

[Upper belvedere - ベルヴェデーレ宮殿 - Wikipedia](#)



環状道路
(**リンクシュトラッセ**)

第12講 海外の文化遺産（近代国家の成立と世界の近代化）

ウィーンの歴史地区

登録範囲

復習

人間と生物圏計画（MAB計画）

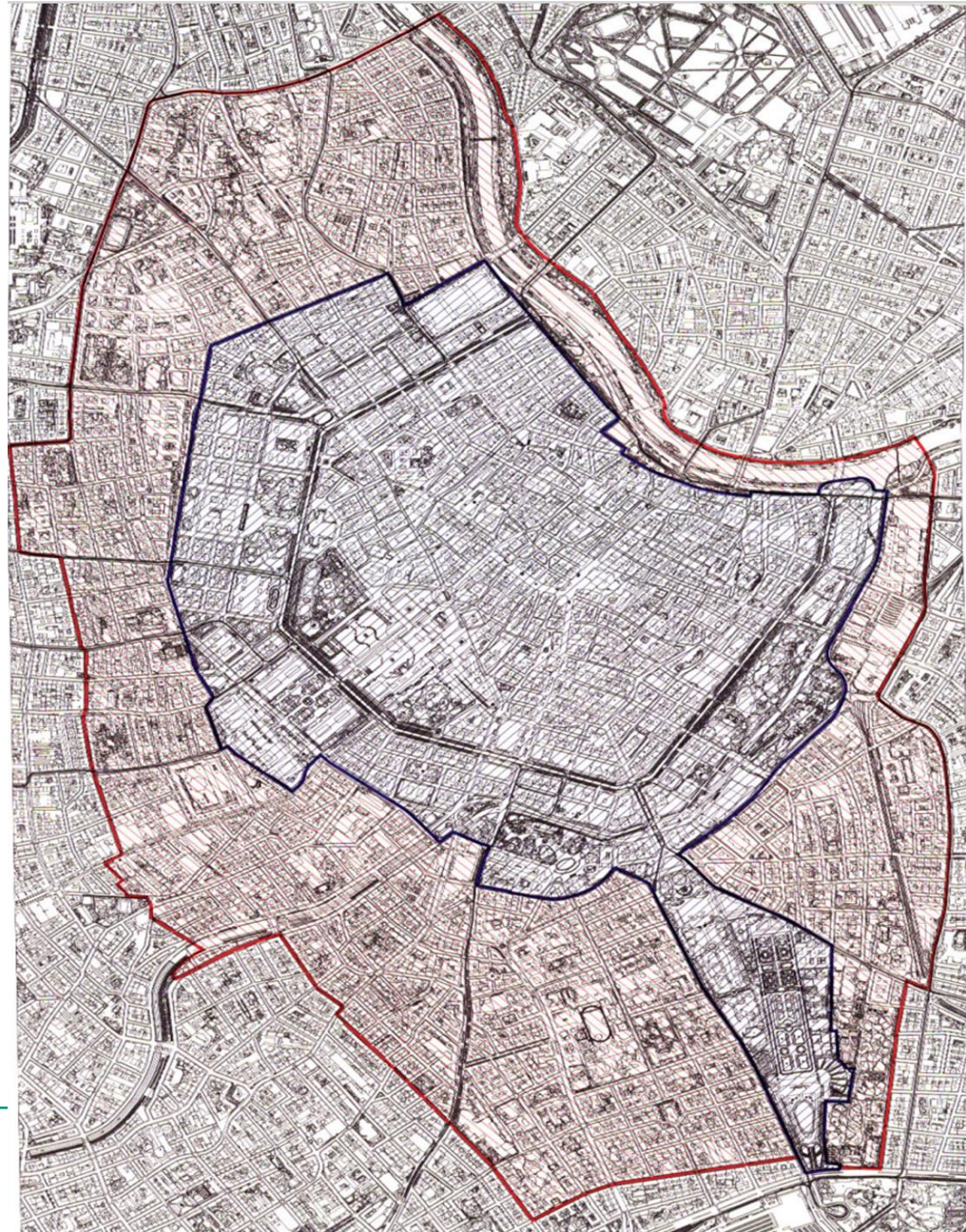
環境資源の持続可能な利用と環境保全を促進することを目的に、ユネスコが1971年に立ち上げた研究計画。

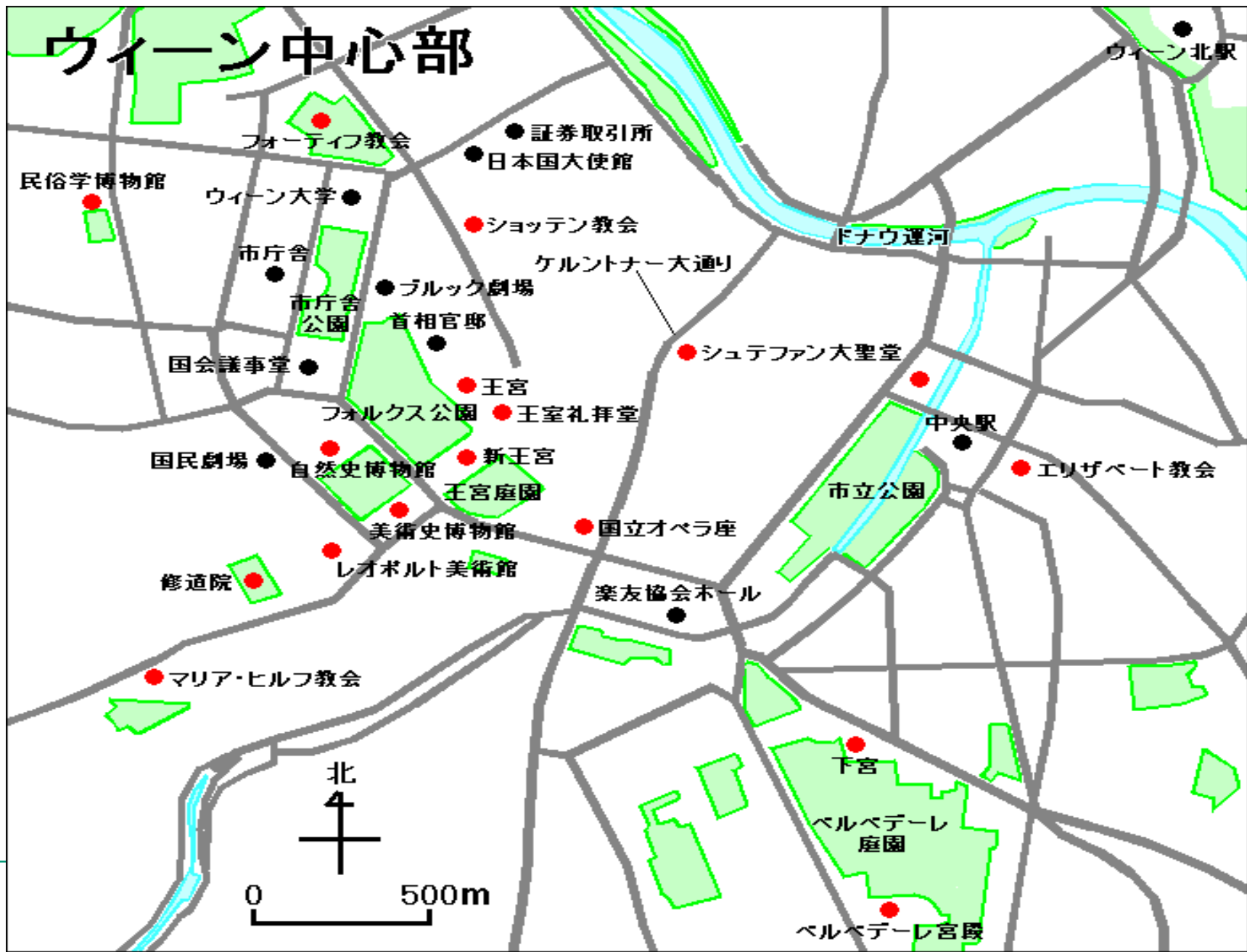
核心地域（コア・エリア）

資産（プロパティ）

緩衝地帯
（バッファー・ゾーン）

移行地帯
（トランジション・エリア）





第12講 海外の文化遺産（近代国家の成立と世界の近代化）

ウィーンの歴史地区

13世紀以降、ハプスブルク家の王都として発展したが、この地区の歴史的建造物は、大きく3種類に分けられている（第Ⅰ～Ⅲ期）

聖シュテファン大聖堂

第Ⅰ期 12～15世紀頃

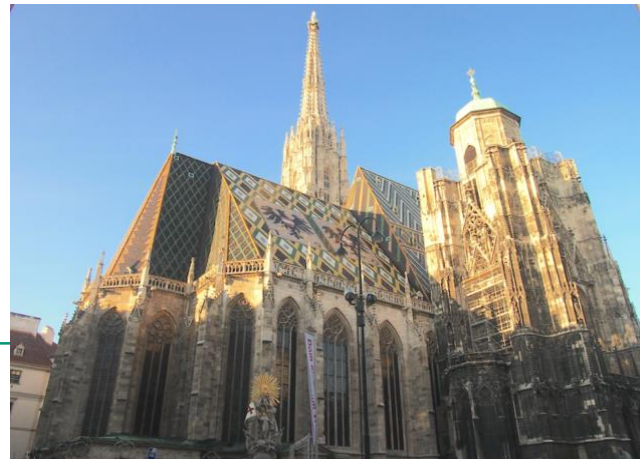


旧市街（コア・エリア）中心に立つ大聖堂。（12世紀）

建築当初はロマネスク様式だったが、13.14世紀の工事では主要部が**ゴシック様式**に改修された。

ひときわ目立つ南塔 136.7m

ハプスブルク家の墓もあり、音楽家モーツァルトが結婚式を挙げた場所としても知られる。



北側の塔を建設予定であったが、当時の財政難のため、工事が中止となり、丸屋根が付けられたままとなっている。

第12講 海外の文化遺産（近代国家の成立と世界の近代化）

ベルヴェデーレ宮殿

第Ⅱ期 17～18世紀頃



17世紀後半の対オスマン帝国船で活躍したプリンツ・オイゲン（1663-1736）が、当時の代表的建築家であったヨーハン・ルーカス・フォン・ヒルデブラントに夏の離宮として造らせた**バロック様式**の宮殿である。

上宮下宮とわかれ、上宮は賓客を迎える場所、下宮は居住空間として使われた。

宮殿からはウィーン市街を一望できる。現在は美術館となっており、グスタフ・クリムトの有名な『接吻』や『ユーディット』など19世紀から20世紀にかけての芸術家の作品が収蔵されている（上宮）。



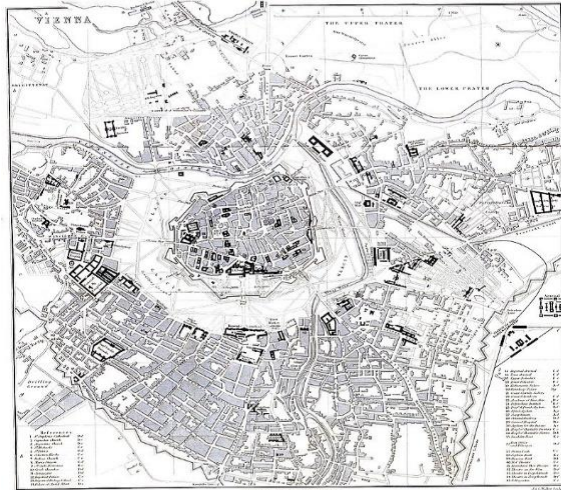
左：クリムト（1901）『ユーディットⅠ』

上：クリムト（1907-1908）『接吻』

第12講 海外の文化遺産（近代国家の成立と世界の近代化）

環状道路（リンクシュトラセ）

第Ⅲ期 19世紀半ば



19世紀半ばにフランツ・ヨーゼフ1世はオスマン帝国軍の襲来を阻止するために造らせた城壁を撤去することを決定し、その跡地にリンクシュトラセ（環状道路）建設を命じた。（1865年完成）
道路上には、国立歌劇場やウィーン大学、博物館や美術館が立ち並び、リンクシュトラセの景観はまるで野外博物館のようである。

新古典主義様式・歴史主義様式（ゴシック・リバイバル様式、ネオ・ルネサンス様式）



美術史美術館
（ゴシック・リバイバル様式）



国立歌劇場
（ネオ・ルネサンス様式）

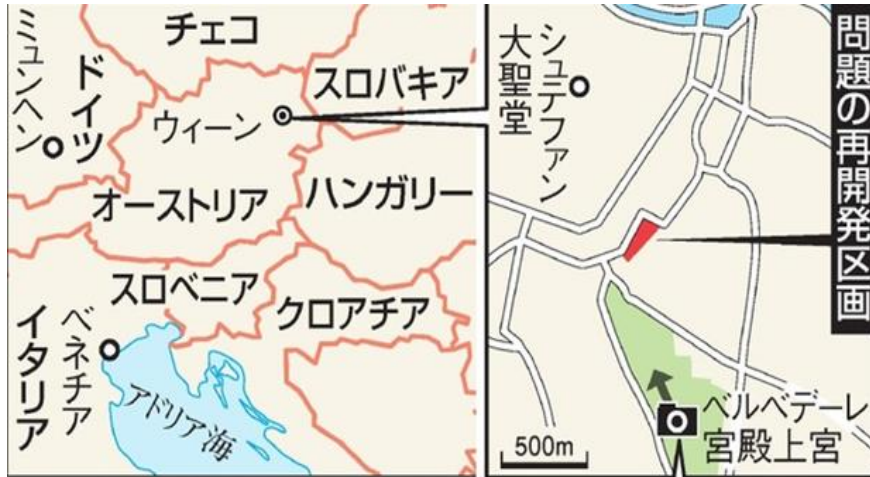


市庁舎

第12講 海外の文化遺産（近代国家の成立と世界の近代化）

危機遺産

高層ビルの建設計画



ベルベデーレ宮殿上宮から見たウィーン市街地



出典：朝日新聞 デジタル記事（2018.2.8）

高層ビルが建設される予定は、ウィーン川が流れる19世紀の市立公園のすぐ南側で、ここには、高さ66メートルの複合施設（ホテル、高層高級住宅、ショッピングセンター、オフィスなど）や新会議場、室内のスケートリンクが入る。

「ウィーン歴史地区」が世界遺産に登録される際、ウィーン（オーストリア）はユネスコと規約書をかわしている。そこでは「景観を壊すものを造らない。」つまり、登録後高い建物（制限43メートル）を立てた場合は、世界遺産取り消し（抹消）となるということである。

ウィーンの住民らの意見は2つに分かれていて、「ウィーン市民らが守っていかなくてはいけない場所」という声と「市民の生活の場所である」という声が出ている。

第12講 海外の文化遺産（近代国家の成立と世界の近代化）

自由の女神像（アメリカ合衆国・1984年登録）

登録基準（1）（6）



現在、ニューヨークのシンボルともなっている自由の女神は、**アメリカ合衆国独立100周年**を祝って、フランスからアメリカ合衆国に贈られたものである。

正式名称：世界を照らす自由
(Liberty Enlightening the World)

1865年 ラブライエの発案により仏米合同の記念碑作成決定

1874年 フランス・パリで製作開始

1884年 完成

1886年 アメリカ・ニューヨーク ベッドロウ島に建立

発案から完成まで、21年かけて自由の女神が完成

発案者：エドゥアール・ドゥ・ラブライエ（フランス人法学者・政治家）

制作者：フレデリック・オーギュスト・バルトルディ（フランス人彫刻家）

困難を救った人物：**ギュスターブ・エッフェル**

ジョゼフ・ピュリッツァー

第12講 海外の文化遺産（近代国家の成立と世界の近代化）

自由の女神像（アメリカ合衆国・1984年登録）

制作上の困難を救った人物

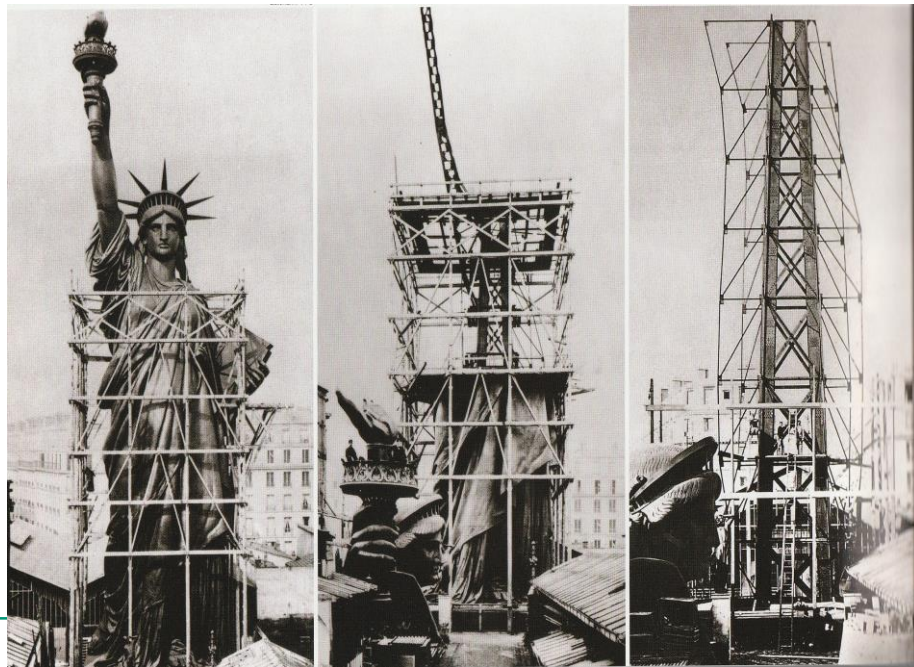
ギュスターヴ・エッフェル

画期的な
構造

重さ約110トンもの女神像をどのように支えるのか？

表面 厚さ2.5mmの銅板300枚以上組み合わせた銅板性の像

強風や気温変化にも耐える鋼鉄製の骨組みによって
像の全重量を支える



フランスにて、パーツ毎に制作

たいまつを持つ右腕や頭部がアメリカ独立100周年記念博覧会やパリ博覧会で披露

1881～1884年 エッフェルにより、骨格に銅板が用いられ、女神像の全身が完成

1885～ 像は約350の部分に解体され、アメリカへ

第12講 海外の文化遺産（近代国家の成立と世界の近代化）

自由の女神像（アメリカ合衆国・1984年登録）

ジョゼフ・ピュリッツァー

資金面で女神像を救った人物

ニューヨーク新聞『ザ・ワールド』社主（新聞王）

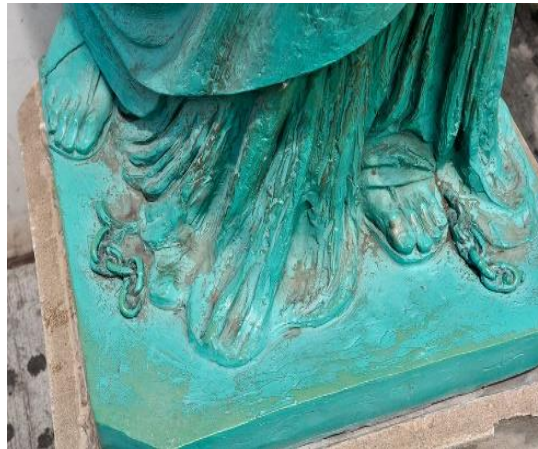
アメリカ国民からどのように寄付を募ったのか？



新聞読者からの寄付を募り、寄進者の名前と金額を全員公表した

顔：製作者バルトルディの母親がモデル

右手：**たいまつ** 左手：**アメリカの独立宣言書** 1776年7月4日（英語・ローマ数字）



宝冠：7つの突起
「7つの大陸と7つの海に自由
がひろがるように」

左足：足かせを踏みつける
奴隷制度と専制制度の象徴

shinekirito.web.app

(1) ワークブック 第7章「近代国家の成立と世界の近代化」